

# 「おななからの手紙」二十九通目(平成二十五年正月)

雨の多いこの季節。私は雨降る浄泉寺が大好きです。

## 雨上がりの光景



雨が降った翌朝、決まってお寺へとお参りに来らる女性がいいます。車ご四十分、決して近くはありません。そして月に何度も訪れ、その際には必ずお寺のお掃除をして帰っていくそうです。雨上がりのこの光景をずっと不思議に思いつながら、その理由を伺えないまま過ぎていたある日、なにげない会話の中で彼女の想いを知ることになりました。

浄泉寺は、四方を山に囲まれた自然豊かな場所にあります。そのため、大自然の落し物が、毎日欠かさず境内へと届けられます。雨や風の強い日は、ひとまわり、さりと。こちらを掃除するには、多くの時間とかなりの労力が必要となります。また、次から次へと落ちくるため、終わりのみありません。しかしながら、掃除は大切なこと、やらないわけにはいきません。

「お寺にお参りに来らる方は、いつ来らるかわからないし、その時が、このお寺への一生に一度のお参りかもしれない。いつ、誰がお参りになっても、ここに参りてきて良かったと喜んで帰っていただきたい。だからこそ、常に掃除をして清潔な場にしておかなければいけない」。住職である父は、いつもこう語り、毎朝落ち葉を掃いています。

この想いに感銘を受け、「私もお役に立ちたい」と自ら動き出していたのが前述の彼女だったのです。



## 素直な想いの先に

ジュキ

法華経というお経の中に、授記という言葉が出てきます。授記とは、「あなたは仏になります」という確約を仏さまからいただくことです。私は、この「仏さまのご縁とご縁のこと」だと思っています。そして、結んだご縁を大切に育んでゆく行いが修行であり、仏に成る道だと思っています。修行と言いつつ、ついつい難しく難しいことばかりをイメージしてしまいます。ところが、「お役に立ちたい、喜んでいただきたい」との純粋な想いと抱き、自身にできることを素直に日々実行していくことが自然と修行となるのだと、彼女の次女から私は改めて気づかせていただいたのです。

彼女は、「これが私の修行」という強い想いを抱いていました。そして、そのことに気付かせていただいた歡びと感謝をお参りとお掃除を通して表現しているのだとおっしゃるのです。彼女のこの心を知った時、「心も磨くことは、まさにこの心一つのことなのだ」と深く感動し、その次女に自然と手を合わせていたのです。

また、経文には、授記を得ることで、迷いが除かれた清々しい心持で仏に成る道を歩むことができると説かれています。それを証明するかの如くに、彼女はいつも整った心、喜んでお掃除という修行をしています。「南無妙法蓮華経」とお題目をお唱えし、お掃除に汗を流す彼女の姿は、とても献身的で、その次女に仏さまとの縁を語り、仏の道を歩む尊さを私は感じます。そして、このように受け止める時、私のまわりには、仏の道と素直に歩んでいる多くの人が存在していることに気付かされます。そして、その修行に励むこの方達とのふれ合いが、私の踏み出すお力としての歩みとなり力強いものにしていくのです。